東京パラリンピック
愛と栄光の祭典

2020年への道を、拓いた人たちがいた――

第32回東京国際映画祭
特別上映作品

製作：上原 明（日芸綜合プロ）
監督・脚本・撮影：渡辺 公夫／解説：宇野重吉／音楽：團 伊玖磨
cinemakadokawa.jp/tokyopara1964/ 配給：KADOKAWA

「パラリンピック」の名付け親となった
1964年の東京大会――
日本障がい者スポーツの原点に迫る幻のドキュメンタリー!!

「パラリンピック」の名付け親となった 1964年東京パラリンピック――
世紀の大会を記録した、幻のドキュメンタリーを発掘・再上映!!

日本障がい者スポーツの黎明期を映した貴重映像

『東京パラリンピック 愛と栄光の祭典』は、1964年の東京パラリンピックを映した世界的にも貴重なドキュメンタリー映画である。当時の大会報告書によるとこの大会では計6本の映像が撮影されているが、本作はその中でも最も長く、大会前の選手の様子や競技中の音声も収められている。1965年の公開以後、ほとんど人の目に触れることのなかった幻の映像が、東京2020パラリンピックを前に盛り上がりを見せる中、初のデジタル化を経て劇場公開される。

愛する家族を想い、前を向く

本作には、開会式や競技といった大会の映像だけでなく、開催に合わせて急遽集められた日本人選手たちへのインタビューも多数収められている。下半身不随の宣告を受け、夫や子供と別れ療養所や病院でひっそりと暮らす選手たち。競技経験と社会保障制度に支えられた明るく前向きな海外の選手たちとの差はあまりにも大きかった。しかし、大会へ向けた競技の練習や海外選手との交流を経て、選手たちは、幼い子供のため、支えてくれた家族のためにと、生きる希望や社会復帰への意欲を取り戻していく。この映画は、選手たちの意識を変えたパラリンピックの意義、そして、日本の障がい者スポーツが今日に至るまで発展してきた礎となった、まさに原点ともいえる大会の様子を映し出している。

1964年東京パラリンピック

「パラリンピック」という愛称は、「パラプレジア」（下半身麻痺）と「オリンピック」を組み合わせたもので、下半身麻痺の選手を対象にした当時の大会の特徴によるものであった。
急遽出場が決まった選手たちだったが、日本人選手はこの大会で、卓球・水泳などの競技で、金メダル1個、銀メダル5個、銅メダル4個を獲得している。劇中には他にも、フェンシング・アーチェリー・バスケットボール・重量挙げといった馴染みの競技や、スヌーカー・ダーチャリーといった近年では見られない競技、さらに車いす競走・車いすスラローム・砲丸投げ等の陸上競技が映し出されている。

STORY

1964年、東京オリンピックは成功のうちに終わった。街が再び落ち着きを取り戻した頃、確かな意義に支えられたもうひとつのスポーツ大会が開幕する。国際身体障害者スポーツ大会。その第一部、下半身麻痺のため車椅子で生活する競技者を対象にした国際大会は、東京パラリンピックという愛称で親しまれた。

パラリンピックに参加するため、身体障がい者の更生指導所では、車椅子に乗ってスポーツに励む人たちがいる。交通事故にあった人、戦争で負傷した人、病気で下半身が麻痺した人、それぞれに車椅子で生活することになった背景を語ってくれる。しかし、スポーツをするその顔に暗さはない。

大会直前、各国の選手が来日する中にはグットマン博士の姿もある。海外の選手たちはみな明るく、日本の選手たちは彼らとの交流を通じて、社会福祉制度の違いを感じつつも、社会復帰への意識を強めていく。そして皇太子・皇太子妃両殿下（当時）が見守る中、いよいよ東京パラリンピックが幕を開ける――。

製作：上原 明<日芸綜合プロ>
監督・脚本・撮影：渡辺 公夫／解説：宇野 重吉／音楽：團 伊玖磨
1965年／ドキュメンタリー／日本／63分／シネマスコープ／白黒／モノラル
配給：KADOKAWA cinemakadokawa.jp/tokyopara1964/ @tokyopara1964

2020年1月17日(金)より復活上映!!

豊洲駅2番出口徒歩5分 アーバンドック ららぽーと豊洲内
ユナイテッド・シネマ豊洲
0570-783-789